

(トップページ：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(サウジアラビア：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

マイライブラリー：0197

(注)本稿は2011.8.17~9.8まで「アラビア半島定点観測」に6回にわたり連載したレポートをまとめたものです。

2011.9.8

前田 高行

世代交代に備えるサウド家御三家

<u>目次</u>	<u>頁</u>
1. 閣僚ポストの世襲化を進める御三家	1
2. アブダラー家：国家警備隊で部族勢力を掌握	3
3. スルタン皇太子家：健康悪化で国王即位に黄信号	5
4. ナイフ内相家：国内過激派對策で辣腕、第二副首相は皇太子への最短距離か？	6
5. 鍵を握るバイ・プレーヤー：サルマン家、ファイサル家、ファハド家、タラール家	7
(1)サルマン家：兄の腰巾着でメッキのはげたサルマン州知事	7
(2)ファイサル家：外交とビジネスを両立させるユニークな家系、第三世代の高齢化が問題	8
(3)ファハド家：ステイリセブンの総領家系、異母兄弟間の反目で綻ぶ結束	9
(4)タラール家：サウド家ご意見番の父親と大富豪の息子	10
6. サウド家の後継者レースの見通し	10

1. 閣僚ポストの世襲化を進める御三家

サウジアラビアでは先月から今月にかけてサウド家有力王族の息子を政府の要職に登用する人事が相次いで発表された。7月3日にナイフ第二副首相兼内相を父親とするサウド王子が父親のアドバイザー(Adviser to Second Deputy Premier and Interior Minister)に就任¹、次いで22日アブダラー国王の息子アブドルアジズ王子が外務副大臣(Deputy foreign minister)に登用され²、更に8月7日にはスルタン皇太子の息子サルマン王子が国家安全保障会議(National Security Council, NSC)の事務局次長に任命された³。因みにNSCの事務局長は同じくスルタン皇太子の子息バンダル王子(元駐米大使)である。またこれより8ヶ月前の昨年11月にはアブダラー国王の息子ミッテーブ王子が父親の跡をついで国家警備隊司令官(Commander of the National Guard、閣僚待遇)に就任している⁴。

現在のサウジアラビアはアブドルアジズ初代国王の息子達、いわゆる第二世代が国政の中樞を握っている。アブダラー国王は首相を兼務し、スルタン皇太子は第一副首相兼国防相である。さらにスルタンの実弟でもあるナイフは第二副首相と内相を兼務している。サウド家王族の中で

はこの3名がトップ3の実力者である。王族閣僚としてはこのほかサウド外相、アブドルアジズ国務相がいるが、両名はそれぞれファイサル第三代国王及びファハド第五代国王の息子でいわゆる第三世代である。

(詳細は <http://members3.icom.home.ne.jp/maeda1/3-1-1MinisterAndProminentPrince.pdf> 「サウド家王族の閣僚・政府要人」 図参照)

王族実力者トップ3のアブダッラー国王、スルタン皇太子及びナイフ内相が閣僚ポストに就いたのはいずれも30代という非常に若い時期であった。例えばアブダッラーは1963年に39歳の若さで国家警備隊司令官に任命されており、スルタンが国防相になったのは1962年(当時34歳)、ナイフは1970年(同37歳)で内務副大臣に就任している(内務大臣就任は1975年)。サウド外相は彼らより一世代若いとは言え外相に就任したのは35歳の時である(1975年)。これから解る通り現在のサウジ政府要職の骨格は1960～70年代に形作られたものであり、既に40年以上も同一人物が同じ重要ポストを占めているのである。現在トップ3は70台後半から80代後半という高齢であり、第三世代のファイサル外相ですらすらで70歳を超えている。

また今回の一連の人事はトップ3自らの権力基盤である国家行政組織に自分達の息子を登用したことに特徴がある。アブダッラー国王は国家警備隊に加え外務省のNo.2ポストも押さえた。スルタン皇太子は数年前にハリド王子を国防副大臣、またバンドル王子をNSC事務局長に据え、今回上記のとおりサルマン王子をNSC事務局次長に配した。そしてナイフ内相はサウド王子にその地位を引き継がせようとしている。サウド家のトップ3は体制維持にとって最も重要と考えられている組織を直系の次世代に継承させる意思を示したのである。

これには恐らく広狭二面の意味合いがあると考えられる。まず広い意味においては現在中東に吹き荒れている「アラブの春」と呼ばれる体制変革運動に対してサウド家が一体となって支配体制を守ろうとする強い意思の表われである。サウド家にとって国防、治安、外交は権力維持のための基本的な重要ポストなのである。そして狭い意味においては刻々と近づく王位継承問題についてアブダッラー、スルタン及びナイフがそれぞれの一族の影響力を温存或いは拡大しようとする意思表示であろう。

サウド家の王位継承問題については既に10年以上前から話題になっている。当初は初代国王の36人の息子のうち誰が次期国王になるか、と言うことに焦点が当てられてきた。しかし最近では第二世代の高齢化が進み、同時に壮年に達した第三世代も後継者候補として取り沙汰されるようになり、後継者レースは混沌としている。

筆者はこれまでもサウド家の後継者問題について「現代の中東の王家シリーズサウジアラビア・サウド家」(2007年)、「ナイフ内相の第二副首相就任が意味するもの」(2009年)、「GCCの王家首長家：サウジアラビア・サウド家」(中東協力センターニュース2010年2/3月号)、「迫るサウド家の世代交代」(2010年11月)などいくつかのレポートを発表した。(いずれも論稿集「MY LIBRARY」<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html> 所収)

サウド家の後継者は現在の国王若しくは皇太子（即ちアブダッラー又はスルタン）のいずれかが死亡した場合に「忠誠委員会」によって新皇太子が選ばれることになっている。同委員会は初代国王の子息 36 人の家系から各一人ずつ選任されている。新皇太子に第二世代の王族が選ばれるのか（ナイフ内相、ムクリン王子などが下馬評に上がっている）或いは一気に第三世代に引き継がれるかは未知数であるが、現在のトップ 3 の家系が有力候補であることは異論が無い。

これまでのサウド家後継者レース観測記事は筆者を含めいずれも王族名を列挙したものであったのに対し本稿ではトップ 3 それぞれの一族をまとめた形で取り上げることでサウド家の後継者問題を論じてみたいと思う（以下トップ 3 の家系をそれぞれ「アブダッラー家」、「スルタン家」、「ナイフ家」と呼ぶ）。なおこれら 3 家系以外で後継者選定に影響力を発揮すると思われるサルマン家（リヤド州知事の家系）、ファイサル家（外相及びマッカ州知事の家系）、ファハド家（前国王の家系）及びタラール家（タラール王子はサウド家のご意見番と見なされており、息子のアル・ワリード王子は有名な実業家）についても言及することとする。

2. アブダッラー家：国家警備隊で部族勢力を掌握

（家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-4AbdullahFamily.pdf> 参照）

アブダッラー現国王は初代国王の 10 番目の息子で母親 Al-Fahda 妃はサウジアラビアの名門部族シャンマリ族出身である。彼は早くから将来を嘱望され、39 歳の若さで国家警備隊司令官に任命されている。国家警備隊はサウド家に忠誠を誓う部族で構成されたいわば近衛連隊とも言うべき精鋭部隊である。アブダッラー自身は派手な生活を好まず砂漠の民ベドウィンとしての誇りを大切にしており、その点で国家警備隊司令官として適任であったと同時に、司令官としての立場を通じて国内の部族を掌握し彼らから絶大な信頼を勝ち得た。今日では部族の絆を重視する姿勢と無私無欲の性格により彼はサウド家王族や国内各地の部族長に信頼されているのみならず国民一般にもカリスマ的な人気がある。

彼自身には男兄弟がなく、ファハド前国王の時代にはアブダッラーは No.2 の皇太子兼第一副首相でありながらファハドを長兄とするスルタン第二副首相（当時）、ナイフ内相、サルマンリヤド州知事など 7 人兄弟（いわゆるスデイリ・セブン）の勢力に押され雌伏の時期を強いられた。90 年代半ばにファハド国王が重病のため執務ができなくなると漸くアブダッラーは国政のイニシアティブを握り、2005 年に正式に第 6 代国王に即位すると強力な指導力を発揮し始めた。

アブダッラーには 5 人の王妃との間に 10 人の息子がおり、その他母親不詳の息子が 4 人いる。娘の数を合わせると判明しているだけでも 33 人の子福者である。このうち Anud 妃との間に 1949 年に生まれたミッターブは父親の右腕として長く国家警備隊副司令官を務め、昨年 11 月に後を継いで司令官に就任した。今年 7 月に外務副大臣になったアブドルアジズはミッターブの 15 歳年下（1964 年生）の異母弟であり（母親は Aida 妃）、また 2009 年にナジュラーン州知事になったミシャール（年齢不詳）の母親は Tadhi 妃である。

アブダッラーの息子達は人数が多いにもかかわらず政府組織内では目立った肩書きの者が少なく、後述するファハド、スルタン、ナイフ等の息子達と比べると対照的である。これはファハド前国王治世下のステイリ・セブン全盛期に彼らが息子を政府の要職に引き上げたのに対し、その間アブダッラー(当時皇太子)は疎外されていたことが大きな理由である。

最近になって漸くアブダッラーは息子を陽のあたる場所に引き上げつつあり、特に国家警備隊については上記のごとく明確に世襲化の目指しているようである。英国のシンクタンク「国際戦略研究所(IISS)」の「Military Balance 2010」によれば国家警備隊の兵力は10万人であり、これはスルタン国防相が統括する陸海空の正規軍12万人に匹敵する規模である。国家警備隊はサウド家に対する忠誠心の高い有力部族で構成されており、いざと言う時にはサウド家にとって正規軍よりも頼もしい存在であることは間違いない。

アブダッラー自身は権力に対して淡泊で思索家の趣がある。彼は国内の安定を最優先課題としている。そのため外交はあまり得意ではなくカタールのハマド首長のような派手な外交活動を好まない。彼はこれまで外交活動はもっぱらサウド外相(ファイサル第3代国王子息)に任せてきた。しかしここに来てアブドルアジズを外務副大臣に任命したことは興味深い事実である。近年サウジアラビアは地域の大国、世界最大の石油資源保有国さらにイスラム諸国の代表として国際的な地位が飛躍的に高まっている。特にエジプトがイスラエルと和平を締結し米国の援助に頼るようになり、さらに今年同国のムバラク大統領が失脚してから、サウジアラビア外交が脚光を浴びるようになった。

外交に熟達したサウド外相はそのような期待に応えて幅広く活躍しているが、サウジ外交は彼一人の肩にかかっており、既に70歳を超えしかも持病を抱えているため引退を望んでいるとも言われる⁵。今回のアブドルアジズ外務副大臣の任命はサウド外相の負担を減らす目的があると考えられる。外交は国防・治安とともにサウド家支配体制維持の重要部門の一つであり、次期外相ポストを狙う王族も少なくないはずである(バンダル元駐米大使など)。その中でアブダッラーが息子のアブドルアジズを外務副大臣に据えたことは注目すべきであろう。

アブダッラー国王は1923年生まれで今年88歳の高齢である(但し生年には諸説ある)。近年は腰痛に苦しんでおり昨年11月には米国で椎間板ヘルニアの手術を受けている。彼は術後モロッコで静養していたが丁度その時中東北アフリカ各国に「アラブの春」と呼ばれる政変が続発、サウジアラビアの隣国イエメン、バーレーンなどでも騒乱が発生した。このため彼は療養を切り上げ急遽帰国した。帰国後、GCC各国首脳に呼びかけリヤドでGCC緊急サミットを開催したが、その時公表された杖をついた国王の写真に年齢による衰えが如実に表れている⁶。

アブダッラーが息子二人を相次いで要職に登用したのは一家の将来を考えたためであろう。既に書いたとおり国防、治安及び外交がサウド家体制維持の三本柱である。このうち国防の正規軍と治安の内務省はスルタンとナイフ兄弟が握っている。このためアブダッラーは国防と治安のもう一方の柱である国家警備隊及び外交を担う外務省を支配下におさめようとしているのであろう。

彼は権力に対して淡泊である。従って彼の真の意図は国防と治安を握るスルタン・ナイフ兄弟と彼ら(及びファハド)の息子達にファハド時代のような専横を許さないための予防的措置であろう。

3. スルタン皇太子家：健康悪化で国王即位に黄信号

(家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-5SultanFamily.pdf> 参照)

スルタン皇太子はアブドルアジズ初代国王の 15 番目の息子である。母親のハッサ妃は名門ステイリ家の出身で、同妃はアブドルアジズとの間に 7 人の男児を産んだ。彼ら 7 人は「ステイリ・セブン」と呼ばれ、長男がファハド前国王でスルタンは次男である。ファハド前国王が 2005 年 8 月に亡くなったため今ではスルタンが「ステイリ・セブン」のリーダー格となっている。

スルタンは 1926 年 (1928 年或いは 1924 年説もある) 生まれで、1947 年にはわずか 21 歳の若さでリヤド知事となり、1953 年に農業大臣として入閣、1962 年には国防航空大臣に就任し現在に至っている。大臣在任期間は来年で実に 50 年に達する。1982 年にファハドが第 5 代国王兼首相に即位した時、実弟スルタンをアブダッラー皇太子兼第一副首相に次ぐ第二副首相に指名した。これは将来、スルタンの皇太子ポストを確実にするための布石であり、実際 2005 年のファハド没後スルタンはアブダッラー新国王から皇太子に指名されたのである。

最近のスルタンは度々米国で手術と長期の療養を行っており、老齢に加え癌を患っていると言われる。2009 年にニューヨークで手術を受けたが、帰国後も病状は改善せず 2010 年 8 月からはモロッコで長期療養に入った。しかし 11 月にアブダッラー国王が米国で腰椎手術を受けることになったためやむを得ず帰国する羽目になった。ただ帰国後の閣議の写真を見る限り生気がなく、国王が帰国すると入れ替わりに再び米国に向かっている。彼の健康が憂慮すべき状態であることは間違いないようである。

スルタンには 6 人の女性との間に 32 人の王子・王女がいる。1949 年にムニーラ王妃 (8 月死去、享年 80 歳) の長男として生まれたハーリド王子は早くから国防航空省に入り現在父親に次ぐ No. 2 の副大臣である。いずれ跡を継いで大臣になるものと思われる。情報省次官であったハーリドの実弟トルキ王子は今年副大臣に昇格している。

息子達の中で最も華々しい活躍してきたのがバンダル元駐米大使 (1950 年生) である。彼は英国でパイロットの訓練を受け、帰国後空軍中尉となった。そして当時のファイサル国王の娘ハイファ王女と結婚した。因みにハイファ王女はサウド現外相の実妹であり、従ってバンダルとサウドは義兄弟の間柄である。バンダル王子は 1983 年に 33 歳の若さで駐米大使に任命されその後 2005 年まで 22 年間にわたり駐米大使として活躍した。特にブッシュ前大統領の時代にはテキサスの大統領私邸に出入りするなど親密な関係を築き、9.11 事件では在米サウジ人の本国緊急避難に手腕を発揮したことで知られる⁷。但しその一面米国製戦闘機など兵器の商談では絶えず黒い噂が流れ、父親スルタン国防相の金脈作りに貢献したことは間違いないようである。彼は米国から帰任後、新設の国家安全委員会 (NSC) 事務局長に就任している。

ハジル王妃の息子ファイサル王子とファハド王子はバンドル王子と同じ 1950 年生まれの双子である。ファイサルは企画省副大臣及びスルタン慈善基金総裁を兼ねており、ファハド王子はタブーク州知事である。二人の実弟であるサルマンは東部州副知事を経て今回バンドル王子の下で NSC 事務局次長のポストに就いた。

スルトンの息子達の中ではバンドル王子が国際的にも名を知られている。しかし彼は駐米大使が長かっただけに国内事情に疎い。また彼には同母の男兄弟がなく、母親はアフリカ生まれでスルトンの召使だったため正式な王妃とは認められず、系譜でも本名ではなく単に「ウンム・バンドル(バンドルの母親)」と記されているだけである。このような点でバンドルはスルタン家の中で孤立していると見ることもできよう。海外に強いバンドルと国内に強いサルマンで互いに補完させようとするスルトンの意図がうかがえる。

既にかいたとおりスルタン皇太子は健康状態が万全ではない。仮にスルタン皇太子がアブダッラー国王より長生きしたとしても果たして国王の職責を正常に果たせるのか懸念が残る。或いはスルタンがアブダッラーよりも早く亡くなる可能性もある。このためスルタン及び彼の息子達はスルトンの存命中にできるだけスルタン家一族の足場を固めたいと考えているはずである。その足場となるのが国防航空省と国家安全委員会そして文化情報省なのである。

4. ナイフ内相家：国内過激派対策で辣腕、第二副首相は皇太子への最短距離か？

(家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-6NaifFamily.pdf> 参照)

ナイフ内相はステイリ妃を母親とする 7 人兄弟(いわゆるステイリ・セブン)の 5 番目の弟である。彼はアブドルアジズ初代国王の 36 人の息子の 23 番目であり今年 78 歳(1933 年生)になる。彼は 1975 年、内務大臣に就任、現在まで 36 年間にわたりその地位を保持している。

内務省はサウジアラビア国内の治安維持を担当している。同国はアラブ諸国の中では治安が良いことで知られているが、これはナイフ内相の手腕に負うところが大きい。イスラム教スンニ派の中でも最も厳格なワッハーブ主義(イスラム原理主義の一つサラフィ派)を国教としているが、同国東部地方に多く居住しているシーア派対策が内務省の大きな課題となっている。さらに隣国イエメンから侵入するイスラム過激派「アラビア半島のアル・カイダ」のテロリスト対策にも悩まされている。アル・カイダはサウジアラビア出身のオサマ・ビン・ラディンが創設した組織であり、サウジ国内でも何度かテロ事件を引き起こしているが、その都度内務省が抑え込んでいる。テロ対策を任務とする内務省はそのためテロの標的になりやすい。ナイフ自身は極めて用心深く立ち回っているが、2009 年には息子のムハンマド内相補が客を装った自爆テロ犯により危うく命を失いかける事件が発生している⁸。

ナイフは内務省を基盤とする強大な権力機構を築き上げ、二人の息子ムハンマドとサウドにこれを引き継がせようとしている。ムハンマドは早くから内相補として父親のもとで働き、サウド(1951 年生)は東部州副知事を経て今年 7 月には内相アドバイザーになっている。因みに彼らの母親のジョーハラ妃は有力部族の一つジルウィ家の出身であり、また妹のヌーラ王女は東部州知事

ムハンマド(ファハド前国王の子息)の妻である。このようにサウド家の第二世代は有力他部族と姻戚関係を結び、第三世代はサウド家の一族内で結婚する例が多い(スルタンの息子バンドル王子がサウド外相の妹と結婚しているなど)。

中東の強権独裁国家では一般に内務省が強大な秘密警察或いは密告組織を持っている。サウジアラビアも同様であるが、同国の場合、地方における監視、密告の機能は今も部族社会が担っている。キューバのグアンタナモ米軍基地に拘束されていたアル・カイダ容疑者とされるサウジの若者たちが本国に送還された時、再び国際テロ活動に復帰することが懸念されたが、彼らの殆どはそれぞれの出身地の部族が引き受けて監視と過激思想に対する教化を行ったことなどはその典型的な例である。内務省が強い力を発揮しているのはリヤド、ジェッダ、ダンマン・アルコバーなどの都市部の治安対策である。

ナイフは2009年以來第二副首相を兼務している。これはアブダッラー国王(兼首相)及びスルタン皇太子(兼第一副首相)が共に健康面で不安を抱えており国政に支障が生じたからである。この第二副首相と言うポストは従来特別な意味を持っていた。と言うのは第三代ファイサル国王時代のファハド、第四代ハリド国王時代のアブダッラーそして第五代ファハド国王時代にはスルタンがそれぞれ第二副首相に任命され、そのいずれもが後に皇太子更に国王に即位しているからである。つまり第二副首相は将来の支配者の地位を約束されたポストでもあった⁹。

しかしアブダッラー現国王はナイフを第二副首相に任命するとともに36人の異母兄弟或いはその息子たちを網羅した「忠誠委員会」を設立し、スルタン以降の皇太子を選出するルールを透明化した。ナイフ内相が次期皇太子(さらには次々期国王)の最有力候補の一人であることには変わりはないが、その地位が約束された訳ではない。反スデイリ派の王族の中にはタラール(ナイフの異母兄弟)のようにナイフの動きをはっきりと牽制する王子もいる。

ナイフとその息子達は内務相ポストの世襲化によりサウド家の中における影響力を温存する姿勢である。

5. 鍵を握るバイ・プレーヤー：サルマン家、ファイサル家、ファハド家、タラール家

(1)サルマン家：兄の腰巾着でメッキのはげたサルマン州知事

(家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-7SalmanFamily.pdf> 参照)

サルマンはアブドルアジズ初代国王の25番目の息子であり、スデイリ7人兄弟の6番目である。1936年生まれ彼の彼は1962年以來39年にわたり首都リヤドの州知事の地位にあり、13州の知事の中では在任期間が最も長い。彼がかくも長く州知事を務めることができたのはひとえに長兄の故ファハド第5代国王や次兄スルタン(現皇太子)或いは4番目の兄ナイフ内相のバックアップによるものと言える。

彼はかなり以前は後継国王の有力候補とされていたが最近ではあまり下馬評にあがらなくなった。既に75歳の高齢であることが主な理由だが、リーダーとしての彼の資質にも問題があると筆

者は考えている。サルマンは人格温厚で慈善活動に熱心なことで知られている。しかし 2000 年 前後から州知事としての行政能力に加えテロ組織に対する資金供与疑惑が問題視されるようになった。2003 年から 2004 年にかけてリヤドで国際テロ組織アル・カイダによるテロ事件が相次いで発生したが、事件を鎮圧したのは兄ナイフ内相であった。治安対策は内務省の管轄であるとはいえ、首都でテロ事件が頻発したことは州知事的能力を問われる問題であり、もし民選知事であれば更迭されていたに違いない。サルマンの責任が追及されなかったのは兄のファハド(2005 年死亡)、スルタン、ナイフが尻拭いをしたからである。

一方テロ組織に対する資金援助問題についてはサルマン主宰の慈善団体が寄付金の資金洗浄(マネーロンダリング)に利用されたとの疑惑が外国、特に米国から提起された。サルマンの 3 男アハマド王子が 2002 年に死亡した時、詳しい死因が公表されなかったため 9.11 事件に関係しているとの噂が流れたほどである。サルマンやアハマドがテロ組織への資金援助或いは資金洗浄に直接関与したかどうか真実は闇の中であるが、温厚さと優柔不断はコインの裏表であり、人の好きを利用されサルマンが問題に関与し或いは関与させられたのかもしれない。

サルマンは兄達に頭が上がらないブラザー・コンプレックスがあると考えられる。彼は兄が外国で手術や療養をする場合、知事の公務を差し置いてでも兄の見舞いにつけつけた。健康を害したファハド(当時国王)がスイスで療養した時、サルマンは兄の病床に付き添い、またスルタンがニューヨークで手術後モロッコで静養した時もサルマンは長期間にわたりリヤドを留守にした。いずれのケースもサルマンは兄の腰巾着となり自己の延命を図ったと見られる。

サルマンには 10 人の息子がいる。そのうち長男のファハドは不節制による心臓病で 2001 年に亡くなり、三男のアハマドもその翌年上述の通り疑惑の中で死亡している。次男のスルタンはアラブ初の宇宙飛行士として有名であり、現在は政府の観光促進機関 S T C のトップを務めている。政府は観光促進に力を入れているが王族のポストとしてはアブダラー、スルタン、ナイフの息子達に比べ格下と言わざるを得ない。4 男で石油省次官のアブドルアジズはかつて日本のアラビア石油の利権延長交渉で派手なパフォーマンスを示したが、交渉は決裂し両国間に大きなしこりを残す結果となりそれ以来彼は石油省次官としては影の薄い存在になっている。

サルマン一族はかつて Sharq Al-Awsat, Arab News など有力紙の発行元 SRMG のオーナーとしてスデイリセブンやサルマン家を PR していたが、経営に失敗しグループは現在富豪の王族アル・ワリード王子がオーナーである。サルマンの 5 男ファイサル王子は SRMG 会長に納まっているが実権は無い。このようにサウド家の中でのサルマン一族の存在感は薄まりつつある¹⁰。

(2)ファイサル家：外交とビジネスを両立させるユニークな家系、第三世代の高齢化が問題
(家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-9AlFaisalFamily.pdf> 参照)

第三代ファイサル国王の家系は「Al Faisal(ファイサル家)」と称されている。現在の王族は全て名前の最後に「Al Saud(サウド家)」が付けられているが、ファイサル家だけは独立した呼称が認められサウド家の中でも特別な存在感を示している。

ファイサル家は国政(特に外交)とビジネスの両方に軸足を置くユニークな一族である。国政はハヤ王妃の息子のハーリド王子(1940年生)がマッカ州知事であり、イファット妃の息子サウド(1941年生)が外相である。サウドは1975年以来36年間にわたり外相をつとめ外交では彼の右に出る者はいないほどの実力者である。またサウドの同母弟トルキ王子(1945年生)は中央情報局長官、駐英大使及び駐米大使を歴任している。但し駐米大使はバンドル(スルタン皇太子の息子)の22年間と言う超長期の在任期間に比べ、後任のトルキはわずか1年半であった。彼が短期間で辞めた理由は明らかではないが、中央情報局長官の在任時期と国際テロ組織アルカイダの暗躍及び9.11テロ事件が重なっていることと関係があるのかもしれない。

ファイサル家の中ではスルタナ王妃の系統がビジネス界で活躍している。一人息子のアブダッラー(2007年死亡)はAl-Faisaliyah Groupを創設、ソニーなど有力外国企業の総代理店として同グループを国内有数の企業集団に育て上げた。グループは現在アブダッラーの子供や孫に引き継がれている。

ファイサル家では既にサウド外相、ハーリド・マッカ州知事など第三世代が中核であるが、サウドとハーリドは共に70歳を超えており、第二世代のサルマンなどとほぼ同じ高齢である。サウド外相はアブダッラー国王に重用されており有力な後継国王候補とみなす向きもあるが、高齢に加え脊椎の手術を受ける(2009年9月)など健康に不安がある。彼自身も引退をほのめかしており後継者レースに加わっていないと見られる。実弟のトルキも駐米大使退任後は鳴りをひそめておりファイサル家のメンバーが後継者争いに加わる見込みは少ない。結局ファイサル家を代表して後継者選出の「忠誠委員会」メンバーとなっているハーリドが長老格のご意見番として後継者指名で存在感を示すのかもしれない。

(3) ファハド家：ステイリセブンの総領家系、異母兄弟間の反目で綻ぶ結束 (家系図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-1-8FahdFamily.pdf> 参照)

ファハド第5代国王亡き後ファハド家を代表して「忠誠委員会」のメンバーとなっているのは1921年生まれで東部州知事のムハンマド王子である。アラビア(ペルシャ)湾に面した東部州はサウジアラビア経済の命運を握る石油生産の中心であり、中央部のリヤド州および紅海に面し聖地マッカと商都ジェッダからなるマッカ州と共にサウジアラビア三大州の一つである。ダハランには国営石油会社サウジ・アラムコの本社があり、ジュベールにはSABIC(サウジ基礎産業公社)と外国企業との合弁による多数の石油化学コンビナートが集積している。またジュベール北方のアル・ズールでは内陸の砂漠地帯で産出されるリン鉱石、ボーキサイトを原料とする化成肥料工場及びアルミ精錬工場が建設中である。このように東部州はサウジアラビア随一の工業地帯として産業の自律的な発展段階に達している。

一方、アラビア湾沿岸には多数のシーア派住民が居住しており州政府の頭痛の種となっている。シーア派住民は1979年にはイラン革命に呼応して騒乱事件を起こしており、最近では隣国バーレーンで騒乱が発生、サウジアラビアは治安軍を派遣した。また油田、石油化学コンビナート、

発電・造水プラント等はイスラム過激派テロの攻撃目標にされやすい。

このため東部州知事の主要な任務は産業振興よりもシーア派住民やイスラム過激派に対する治安維持であると言える。ムハンマド知事のメディアなどに対する露出度が低いのは自らがテロの目標になっていることを自覚しているからかもしれない。但し彼があまり表面に出ないのは本人が利権がらみのダーティーなビジネスに熱心だからだ、という者もある。一昨年同地を揺るがしたゴセイビ財閥倒産事件で騒がれたサード財閥の当主アル・サネアと知事は密接な関係があったと言われる。更に父ファハドの死後、その遺産相続をめぐる異母弟で国務相のアブドルアジズ王子と醜く争ったなどといった噂が流れ、彼には守銭奴のイメージが付きまとっている。そのアブドルアジズ王子（1971年生）自身はファハドの最も若い息子で国務相に抜擢されたのは父親の溺愛のおかげだと言われ、事実父親の死後も国務相の地位にとどまっているものの全く棚上げされている状態である。

その他のファハド一族ではファハドの孫ナワーフが青年福祉庁の副長官である。彼はいずれ父の故ファイサル長官の跡を継ぐものと考えられるが、省庁としては小粒である。このようにファハド一族には傑出した人物が見当たらず、異母兄弟間で反目しているため、後継者問題に対して一族の結束力は低い。

(4)タラール家：サウド家ご意見番の父親と大富豪の息子

タラール家当主のタラール殿下は1931年生まれで今年80歳になる。若い頃にサウド家に反抗し「自由プリンス」としてエジプトのナセル大統領のもとに亡命したエピソードの持ち主である。後に詫言を入れてサウド家の一員に復帰するが、その経歴のため後継者リストの対象外とされている。それでも彼は「忠誠委員会」のメンバーに加わっている。年齢故にサウド家の長老と扱われしかも自身が後継者候補でないことから「忠誠委員会」における後継者選びでも中立的な立場として鍵になる1人である。

タラール殿下の1人息子はアラブの大富豪と言われるアルワリード王子である。彼は父親の亡命経歴と母親が非サウジ人(レバノン初代首相の娘)であるため官僚組織の中での出世をあきらめ国際的な投資家として成功を収めたのであるが、近年は国内回帰の意向が強いように見受けられる。アブダラー国王の国内産業振興策に協力する形で地歩を固め、後継者レースにも色気を示していると言われているが、これまでの経歴から見ても他の王子からのバックアップは期待できない。但し産業の多様化、若年層の雇用確保などサウジアラビアが直面している経済問題に対して彼は他の王族には無い豊富な経験と知識を有しており、後継者となる王族から協力を求められることが考えられる。

6. サウド家の後継者レースの見通し

サウド家の後継者として「忠誠委員会」で指名される次期皇太子はアブダラー、スルタン、ナイフ各家のいずれかから選ばれる可能性が高い。但し委員会がいつどのような状況の下で開催されるかは予測がつかず、不確定な要素が極めて多い。現在考えられる最大の不確定要素はスル

タン皇太子が次期国王に即位できるかどうか、つまり彼がアブダラー国王よりも長生きするかどうかである。また仮に即位したとして果たして国王としての職務を遂行できるであろうか。サウジアラビアは国際的にもプレゼンスが高く、また国内にも解決すべき多くの問題を抱えており首相を兼務する国王は激務である。彼の健康状態を見る限りとても無理であろう。

御三家の第三世代の王子たちは副大臣に就任するなど政府内部でそれなりの地位にあるが、サウド外相を除いて傑出した人物は見当たらない。スルタン、ナイフなど第二世代があまりにも長く大臣ポストを続け、第三世代へのバトンタッチを怠ったつけが回っていると言える。

現在最も可能性が高いのはスルタン皇太子が国王より先に亡くなるか、或いは重病で執務不能として皇太子を退位しナイフがその後を継ぐシナリオであろう。しかしいずれの場合も「忠誠委員会」の推挙が必要であり、タラール殿下を含め非スデイリ系の王族委員の対応が注目される。スデイリ系と非スデイリ系の二つのグループに意見が分かれた場合、妥協案としてどちらの系統でもない第二世代の王子、例えば 35 男のムクリン中央情報局長官(68 歳)に落ち着くケースも考えられる。第三世代はいずれもドングリの背比べであり、「忠誠委員会」の過半数の支持を得るのはむずかしいであろう。

このように見るとアブダラー、スルタン及びナイフの御三家が息子達を次々と副大臣級に登用し大臣ポストの世襲を既成事実化しようとしているのは、誰が次期国王になっても現在保持している権力を明け渡さないと言う強い意思の表われであろう。

しかしながら後継者選定の真の問題点は王族の合議制で決定する「忠誠委員会」方式をいつまで続けられるかということに尽きる。委員会方式は一見民主的に見えるが、これはあくまでサウド家内部の理屈であり、外部には説得力がない。歴史を見ても王位継承は直系長子(特に男子)相続制度が最も安定している。かつての中東は弱肉強食の世界であり、一族の統率者としての資質に国家の存亡がかかっていたため一族の合議体(マジュリス)によって後継者を選出してきた。

これに対し現代世界は国家を基本として成立しており、国家そのものが消滅する可能性は殆どない。従って君主の承継ルールを単純化して王族の内紛を表面化させないことこそ国民が君主制の継続を容認することにつながると思われる。中東北アフリカ諸国ではこれまでリビアのカダフィ大佐、エジプトのムバラク前大統領、イラクのフセイン元大統領等々による共和制革命が結局君主制から独裁制の強権政治に変わっただけであると言う苦い例が多い。不安定な共和制国家よりも安定した君主制国家を望む国民が少なくないと言う事実にも目を向ける必要があろう。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642

¹ Arab News on 2011/7/23, 'Abdul Aziz is deputy foreign minister',

<http://arabnews.com/saudiArabia/article476493.ece>

² Arab News on 2011/7/4, 'King appoints adviser to Prince Naif'

<http://arabnews.com/saudiArabia/article466271.ece>

³ Arab News on 2011/8/8, 'Salman bin Sultan named assistant to NSC chief

<http://arabnews.com/saudiArabia/article484685.ece>

⁴ Arab News on 2010/11/18, 'Prince Miteb named commander of National Guard'

<http://arabnews.com/saudiArabia/article194607.ece>

⁵ 拙稿「辞めさせてもらえないサウド外相とナイミ石油相」(2007年4月)参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0154Saud&Naimi.pdf>

⁶ 拙稿「写真は語る：サウジ国王衰えたり」(2011年5月)参照

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0179KingAbdullahInGccSummit.pdf>

⁷ 詳しくは拙稿「現代中東の王家シリーズ1 サウジアビア・サウド家 第13回スルタン皇太子家」(2007年)参照。<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/A15Saud.mht>

⁸ Arab News on 2009/8/28, 'Prince Muhammad escapes assassination attempt'

⁹ 詳しくは拙稿「ナイフ内相の第二副首相就任が意味するもの」参照。

[http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/A36%202nd%20deputy%20PM\(Naif\).pdf](http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/A36%202nd%20deputy%20PM(Naif).pdf)

¹⁰ 拙稿「落日のサルマン家」(2003年7月)参照

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/A18%20Salman%20family.mht>